書評と紹介

Mire Koikari著

Pedagogy of Democracy: Feminism and the Cold War in the U.S. Occupation of Japan.

評者：豊田　真穂

第二次世界大戦後のアメリカによる日本占領は，現在に至るまでアメリカが他国に軍事介入をした「成功例」として位置づけられている。それは，「かつての敵国が占領改革を経て民主主義国へと見事に成長した物語」として描かれてきた。その象徴的な例として，日本女性の解放があげられる。例えば，戦後になってようやく実現した女性参政権は，「マッカーサーの贈りもの」と呼ばれている。また，両性の「本質的平等」という憲法の条項を起草したアメリカ人女性ベアテ・シロタ・ゴードンは，日本女性の英雄的存在となっている。「アメリカ占領軍によって日本女性が解放された」という言説は，日米双方の研究によっても補強されてきた。

しかし，この日本女性の解放言説は，第二次世界大戦後の世界における自由と民主主義のリーダーとしてのアメリカの覇権を正当化し，さらに新生日本の誕生を強調することによって戦時下の日本の植民地主義を忘却させてしまう。本書は，こうした問題に対する関心から，占領下のジェンダー改革を「成功例」としてではなく，冷戦期の共産主義封じ込め政策の一部として，また帝国主義的な態度をはらむ西洋フェミニズムのひとつの事例として再検討する。

本書の概略を紹介しておこう。第１章では，批判的フェミニズムの視点から「成功」の物語としての占領改革を問い直すという目的が示された後，これまでの占領研究，冷戦文化研究，そしてポストコロニアルフェミニスト研究の成果をまとめ，本書をこれらの学問領域にまたがる学際的な研究として，以下のように位置づける。

まず，これまでの占領研究は「逆コース」を分岐点として時期区分をしているが，それを単純すぎるとし，ジェンダー改革には占領当初から人種主義や性差別，帝国主義的な要素があったと指摘する。すなわち，日本占領を帝国主義的・植民地主義的な場における権力作用の一例として検討するところに本書の独自性がある。特に，ヨーロッパとアメリカの帝国主義は「現地女性」の位置づけが以下の２点において類似しているという。１つは，植民地支配を男女間の性的関係になぞらえて理解した点である。植民者である「白人の男性」は，「フェミニンで有色で性的対象」としての占領地を侵略し探検し征服する，というメタファーで語られる。２つ目は，現地の女性たちが家父長的支配のもとで隷属状態にあるということが，その地が非文明的でかつ人種的に劣等であることの証とする点である。こうした現地女性の位置づけによって，その地を文明化するという名目で植民地支配が正当化される。基本的には占領期にも同じ力学が働いたという。

また冷戦文化という枠組みのなかで占領改革をみることも本書の特徴である。冷戦期のアメリカでは，物質的な豊かさに基づく白人ミドルクラスの異性愛の家庭こそが，ソ連の共産主義

に対抗する民主主義の特性であり，アメリカの優位を証明するものとして賛美されていた。そのため当時のアメリカ社会では，ウイルスのように増殖する共産主義の「封じ込め」政策とともに，女性たちを家庭の中に「封じ込め」ておく必要があると考えられていた。そして同じことが，占領下の日本にも当てはまるという。

最後に，国境を越えたシスターフッドを形成しようとした西洋フェミニズムを批判するフェミニストポストコロニアル研究の視点を導入している。西洋の女性は，植民地の非西洋女性を「抑圧された犠牲者」で「非文明的で劣った他者」とみることで，「解放された自己」というフェミニストの理想像を描くことが可能となった。「抑圧された非西洋女性を救済する西洋女性」という構図は，占領期のジェンダー改革にもみられるという。さらに抑圧された他者という理解では，現地の女性たちの主体性を見落としがちである。そのため，植民地下の女性たち自身のフェミニズム形成をみる必要があると指摘する。

続く第2章では，日本女性の解放言説のシンボルともなっている女性参政権の実現と新憲法の制定を，それぞれマッカーサーとベアテ・シロタ・ゴードンを中心に検討している。著者によるとゴードンは，「人種的に劣等な他者である日本女性を救済する西洋人」という帝国主義的な視点をマッカーサーと共有していた。特に，ヨーロッパ生まれのユダヤ人であり，かつアメリカ人として占領に関わったゴードンは，ヨーロッパとアメリカの帝国主義をつなぐ役割をしたともいえる。とはいえ，ゴードンは完全にアメリカ帝国主義的な態度をとったわけではない。例えば，合衆国憲法よりもワイマール憲法を参照するなどアメリカの優越に疑義を抱いていた。さらに，両親がロシア出身であることからGHQの民間諜報部ににらまれるなど，ゴードンは両義的な位置に置かれていたと指摘する。また，ゴードンが起草した男女平等の案文は，憲法を検討した国会での議論において，日本独自の「醇風美俗」を守るために家庭こそが礎と考える加藤シヅエらによって，結局，戦前からのナショナリズムに引き戻された面もあった。

第3章は，日米両国に住むアメリカ人女性リーダーたちの占領下のジェンダー改革への関わりを分析している。これまでの研究では，日米の女性たちが「女性ブロック」を形成し，男性優位の占領軍組織や日本政府に抵抗したと理解されてきた。著者はこの図式は単純すぎるとした。そして女性同士の連帯は，むしろ冷戦期のヘテロセクシズム（異性愛主義）の性規範や秩序を揺るがすような効果があったと指摘する。その一方で，アメリカ人女性リーダーたちは，日本という地を自らが「女性らしい貢献」のできる場とみなした。この意味において占領下の日本女性は，アメリカの覇権や帝国主義などといった冷戦の力学のなかで「利用」されたという。そしてジェンダー改革を享受した日本女性たちもまた，冷戦下の家庭性を強調する動きに積極的に関わっていた。

一方，占領軍がいかに家庭性を強調し女性たちを家庭へ封じ込めようとしても，その思惑通りにいかないこともあったという。例えば，1950年に民間情報局（CI&E）のエセル・ウィードが11名の日本女性指導者たちをアメリカ視察旅行へと連れていった時のことである。アメリカの民主主義をじかに学ぶ機会として，「アメリカン・ホーム」に実際に滞在するという経験をした女性たちは，家電製品やキッチン設備が充実していることに驚き，そのおかげで主婦たちが自由な時間を得ることができ，家庭の外へ出ていく様を賞賛した。その一方で，アメリカの民主主義や男女平等はこうした物質的豊かさや，圧倒的な経済力の上に成り立っているこ

とに気付いてしまう。アメリカ視察旅行に参加した女性のひとり，国鉄労働組合婦人部長，丸沢美千代は言う。「日本とは比較にならないほどの広大な土地や富，そして天然資源をもつアメリカを真似するなんてできない。日本は労働運動を主軸として戦後復興や民主化を進めるしかないと決意をあらたにした」(p.106)。このように冷戦下で賛美された家庭性は，皮肉にも，実物の「アメリカン・ホーム」をみた女性リーダーたちにとって実感のもてない対象となったのである。

第4章では，占領政策に抵抗するものとして，左派労働戦線の女性たち，特に野坂龍と宮本百合子を中心に分析している。彼女たちは，冷戦期のアメリカ的な家庭性ではない別の女らしさを，ソ連や中国の女性像に求めていた。こうした左派労働戦線の女性たちの急進化を目の当たりにした占領軍当局は，労働教育やレッドパージなどを通してその活動を封じ込めようとする。これに対して左派の女性たちも日本民主婦人協会などを立ち上げて抵抗した。このように占領期日本は，しばしば冷戦下の米ソ対立が持ち込まれる場ともなった。

しかし，家庭性や女らしさなどの点で左派の女性たちは完全にアメリカ占領に対する対抗言説をつくっていたわけではなかったという。例えば，労働教育の一環として1947年夏に行われた「婦人文化講座」では，家庭を足場にした女性労働者の政治参加を呼びかける加藤シヅエと，社会制度を変革して女性が結婚後も仕事を続けられることを主張した野坂龍という相矛盾するふたりの論客の対立が表面化した。その一方で野坂は，たとえ女性が男性と対等に働くようになっても女らしい美しさは失われないことを強調した。イデオロギー上の転覆（共産主義）が性的な転覆（同性愛）とリンクする冷戦という文脈において，日本の左派労働戦線の女性たちもまた，アメリカ的な女性性やヘテロセクシズムを擁護してしまったのである。

最後の第5章では，アメリカ兵の間に蔓延した性病や「墜ちた女」をめぐる言説を検討している。冷戦下において性病は，単なる公衆衛生や健康の問題ではなく，国家の安全保障，アメリカ的生活様式，そして究極的には民主主義をも脅かすと考えられていた。共産主義の広がりを「ウイルス」にたとえていたように，伝染する性病もまた民主主義を脅かすものと考えられた。というのも，冷戦期においてアメリカが誇るべき民主主義は，自制心のあるモラルの高い市民によって維持されなければならないのに，性病はその自制心やモラルが欠如していることの証となるからである。そこで占領軍は，高いモラルや心身ともに健康な男性兵士をつくるために，従軍牧師との対話や運動競技などの娯楽プログラムを通じて，アメリカのマスキュリニティを取り戻そうとした。しかしこうしたヘテロセクシュアルな性規範や男らしさの回復を狙ったプログラムは，牧師との対話や検診を伴ったため頻繁に男同士のセックス談や男性身体の観察が行われ，皮肉なことに，逆に男同士のホモソーシャルな領域をつくりだす結果となった。そしてまさにそのことは，共産主義に対抗すべきアメリカ民主主義にとって重要なヘテロセクシュアルな家庭性に基づく秩序と真っ向から矛盾してしまったと指摘する。

これまで占領は，男性的で支配的なアメリカと女性的で従属的な日本のヘテロセクシュアルな出会いであるというジェンダー化された理解をされてきた。占領軍自身もそのようにみてきたし，研究者たちも同じように論じてきた。ところが実際にはアメリカ兵の性病という点において，アメリカのマスキュリニティは揺らいでいたという。一方，従属的であるはずの日本の女性もまた，占領の成功を脅かす脅威であった。

占領軍は，性病が蔓延する原因は日本女性であるとして，路上の女性たちを無差別に一斉検挙し，職業にかかわらず強制的に性病検査をするという暴挙に出た。占領軍のこの動きは，左派労働戦線の動きが活発化したときと同時期の出来事である。著者はここから労働運動の急進化を封じ込める目的もあったと分析する。一方，これに対抗して日本の女性たちは，階級の垣根を越えて団結し，日本政府と占領軍を批判した。さらに日本の男性たちも，自らの女性を管理する権威を脅かされたことに対して反発した。このように性病対策をめぐって日本側は占領軍に対する対抗言説をつくりだす。しかし同時にそのことが，「ケガレた身体」をもつ者として売春婦をスティグマ化したと著者は指摘する。

つまり占領下のジェンダー改革は，アメリカが戦後のヘゲモニーを確立する際に重要な役割をした一方で，占領軍の性管理に対しては日本女性が階級を超えて連帯するきっかけをつくったり，日米の女性たちがホモソーシャルな関係性を築いて冷戦期のヘテロセクシズムに対抗するなど，アメリカの支配を揺るがしていた。日本女性たちはときにアメリカのヘゲモニーを強化したが，ときに転覆もしていたのである。

最後に著者は，占領研究，冷戦文化研究，ポストコロニアルフェミニスト研究といったいくつかの学問領域をまたがって考察したことによって，以下のような新たな知見を得たという。まず占領研究に関しては，女性解放や民主化という占領改革を受ける受動的な存在として日本女性を描くのではなく，女性たちが冷戦期の「封じ込め」政策に積極的に参加し，また動員されていったことに注目すべきであること。国内の動向に目が向きがちな冷戦文化研究においては，海外での動向にも目を向けること，そしてトランスナショナルな連帯をした女性たちが，ときに女性性や家庭，ヘテロセクシャルな規範に対抗していたことにも注意する必要があるということ。最後に，ポストコロニアルフェミニスト研究においては，非西洋の女性の主体性に注目することが二項対立的な関係性を再検討することになること。そして著者は再度，日本女性を解放したアメリカ占領軍という「神話」が，第二次世界大戦後のアメリカのグローバルリーダーという自己像を正当化してきたこと，そして無力な被害者である日本女性を救済するという物語が，日本女性も積極的に関与した戦時下のアジア諸国に対する人種主義的で帝国主義的な行為を忘却させてしまったことを指摘し，本書を閉じている。

以上のように本書の概要が非常に長くなってしまったのは，評者の力量不足を棚に上げるにしても，本書がいかに厚みのある研究であるかを物語っている。特に評者の印象に残ったのは，日米の国境を越えた女性同士のネットワークの位置づけである。これまでの研究では，占領軍女性スタッフと日本女性との間に形成された「女性ブロック」あるいは「女性政策推進ネットワーク」が中心となって，多くの「進歩的な」改革を進めていったとする図式が定説となっていた。これに対しては，近年になり米山リサらが，批判的フェミニズムの視点から，アメリカによって「救済」の対象となる日本女性をみるアメリカ人女性のオリエンタリスティックなまなざしを問題化している（米山2003）。これに加えて本書は，「女性ブロック」そのものが冷戦期アメリカのヘゲモニーを揺るがす効果があったことを指摘している。つまり，日米の女性たちが交流していくなかで築かれた絆は，アメリカの家庭性を基礎としたヘテロセクシズムとは真っ向から対立する「ホモソーシャルな領域」をつくることで，意図しないままにアメリカのイデオロギーを転覆させる結果となったという。この指摘は新しい。冷戦文化というより大

きな枠組みのなかで占領改革を検討するという視点をもったからこその見解であろう。これ以外にも非常にスリリングな分析が多く，最新の研究動向を組みこんだ非常に明晰な論旨の良書である。

その一方で，少々の不満は残る。本書からは，改革の実態がよくみえてこない。実際の改革がどのようなものだったのか，その改革を人びとはどのように受け止めたのか，そしてその改革が戦後の日本にどのようなインパクトをもったのか，またどのように記憶されていったのか，といった問題の考察がなかった点は惜しまれる。それは，著者の関心や本書の意図から外れるのかもしれない。しかし占領期には，さまざまな矛盾や限界があったにせよ，日本社会の多方面において「成果」と呼ぶにふさわしい改革が行われていた。それはむろん，決して占領軍から「与えられた」ものではなく日米間の確執と交渉の結果である。占領期のジェンダー改革に「成功」の物語ではない新しい理解を提示するという本書の目的に沿えば，なぜこれまでの研究が「成功」言説に引きずられていたのかもまた，考察の対象となるだろう。

例えば，第4章で紹介されるヘレン・ミアーズの労働諮問委員会報告書は，日本の女性を無力な犠牲者とするオリエンタリスティックな視点からは書かれていないし，ウィードが重視したミドルクラスの女性たちではなく左派の女性労働者たちこそが日本のリーダーとなるべきことを強調した点などにおいて，占領改革のなかで対抗的な物語をつくったと指摘している。たしかに主流の言説に反していたことは事実である。しかし，ミアーズの報告書はその後の労働改革に大きな影響を与え，その結果，例えば労働省婦人少年局が設置されている。婦人少年局が設立されたことは「成果」といえる。その一方で，婦人少年局はミドルクラスの家庭性を基盤とした女性観が背景にあった。こうした実際の改革の意義や矛盾は，ミアーズの報告書の異端性を指摘するにとどまる本書からはみえてこないのである。しかしこれは「ないものねだり」だともいえよう。

本書は，日本占領をどのように理解するのかという問いに冷戦文化研究やポストコロニアルフェミニスト研究を援用しつつ明快に応えている。占領軍を「救済者」でなければ「抑圧者」としてしか描けなかった占領研究にとっては，貴重な指摘であり重要な貢献である。占領研究者だけでなく，冷戦文化，アメリカ帝国，ポストコロニアル，フェミニズムなどに関心のある研究者に，手にとってもらいたい一冊である。

（Mire Koikari. 2008. *Pedagogy of Democracy: Feminism and the Cold War in the U.S. Occupation of Japan*. x+226pages. Philadelphia: Temple University Press.）

（とよだ・まほ　関西大学文学部准教授）

参考文献

米山リサ　2003「批判的フェミニズムの系譜からみる日本占領」『思想』第955号